

特質構造の濫用と思われる説明について

—影山 (2002) の批判的検討—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

10/07/2007, 07/01/2007 (再々改訂)/03/19/2007 (再改訂)/ 02/24/2007 (改訂)/ 02/14/2007

1 はじめに¹⁾

生成辞書理論 (Generative Lexicon Theory: GLT) [14, 15, 25] は (主に名詞の) 特質構造 (qualia structure) という概念を使って, begin NP の解釈などの幾つかの興味深い事実の説明を提案している。生成辞書理論によれば (1a) の意味が (1b) と解釈されるのは, book という名詞が (2) に指定するような特質構造をもつからという説明が与えられる。

- (1) a. He began the *book*.
b. He began { i. reading; ii. writing; ... } the *book*.

(2) “book(x)” = “本 (x)” の特質構造

- a. Agentive:
i. $\langle e, \langle \text{執筆者 } a \text{ が, } x \text{ を, 書く} \rangle \rangle$
ii. $\langle e, \langle \text{出版者 } b \text{ が, } x \text{ を, 出版する} \rangle \rangle$
iii. $\langle e, \langle \text{販売者 } c \text{ が, } x \text{ を, 書店 } d \text{ で, 販売する} \rangle \rangle$
iv. ...
b. Telic:
i. $\langle e, \langle \text{読者 } d \text{ が, } x \text{ を, 読む} \rangle \rangle$
ii. $\langle e, \langle \text{購入者 } e \text{ が, } x \text{ を, (販売者 } c \text{ の) 書店 } d \text{ から, 購入する} \rangle \rangle$
iii. ...
c. Formal: ...
d. Constitutive: ...

e. 変項 a, b, \dots, e の具体例

- i. x の例: 伝奇集, 族長の秋, ウンコな議論,
ii. a の例: ホルヘ・ルイス・ボルヘス, ガブリエル・ガルシア=マルケス, 山形浩生, ...
iii. b の例: 新潮社, 講談社, 第三書房, むぎ書房, ...
iv. c の例: 三省堂, ジュンク堂, アマゾン, 京大生協書籍部, ...
v. d の例: 加藤鉦三, ...
vi. e の例: 加藤鉦三の娘, ...

以下の議論の詳細には関係ないので, Formal, Constitutive の内容は割愛した。

1.1 特質構造に関する注意

特質構造は四つのマクロ役割である Agentive (A), Telic (T), Formal (F), Constitutive (C) ごとに一つしか述語が指定されないことが多いが, これが定義であると理解するのは誤りである。おのおののマクロ役割について述語の集合 $P(A), P(T), P(F), P(C)$ が指定され, 文脈に応じて, その集合から最適な述語が一つ選択されると考えなければ, 実際のデータの複雑性には対処できない。おそらくは同じ意識からなされた拡張である拡張特質構造 (extended qualia structure) [1, 16] も参考にされたい。

1.2 特質構造の濫用

特質構造は有用な概念だが, 一定の制約をかけずに使うことは濫用につながる。本稿で私はその濫用に該当と思われる説明の一つを取り上げ, 問題点を指摘する。

特質構造の濫用と思われるのは影山 [29] の「 Y が X を始める」の分析と説明である。本稿は彼の論文

¹⁾ 本稿の執筆に当たって, (いつものように) 加藤鉦三 (信州大学) との議論が有益であった。特に §2.7 の議論には加藤氏の寄与が大きい。特質構造の詳細に関しては, 小野尚之 (東北大学) から有益な意見を頂戴した。中本敬子 (文教大学) には黒田節のトーンダウンのための検閲をお願いした。以上の三人の方々の助力には, この場を借りて感謝したい。なお, 内容に関する責任はすべて黒田にある。

の趣旨をより生成辞書理論の正統派に近い立場から批判的に検討し、対案を示す。

なお、本論文は加藤・黒田 [24] に対して補完的な関係にある。

2 影山 [29] による「X を始める」の分析の問題点

2.1 影山 [29] の主張の概要

影山 [29] の論点は次の A, A', B, C である:

- (3) A. 「始める」は次の異なる二つの意味をもつ。
- i. タイプ 1: 〈着手〉
 - ii. タイプ 2: 〈活動の発生〉
 - 2a. 習い事, 趣味;
 - 2b. 組織業務・団体活動;
 - 2c. 製造販売
- A'. タイプ 2 の語義は Goldberg [4] の言う意味での「構文的意味」ではない。
- B. 「X を始める」のタイプ 2 の解釈を与えるのは、(Goldberg 的な構文的意味ではなくて) 生成辞書理論で言う名詞 X の特質構造によって説明可能な語彙的意味である。
- C. (英語の begin X (ただし X は NP) と日本語の「X を始める」の比較から見て) 名詞の特質構造の中身が、英語では比較的「見えやすい」のに対して、日本語では不透明である (p. 110)

以下、§2.2, §2.3, §2.4, §2.6, では A, A', B, C の妥当性をおのおの論じる。

2.2 A の妥当性

関連箇所を影山 [29] から適宜引用する:

- (4) 「始める」の二義性は単に感覚的な違いではなく、構文にも反映される。まず着手の解釈では他動詞「始める」が自動詞「始まる」と交替するが、活動の発生の解釈では自動詞は使われにくい。(p. 103)
- (5) ... すぐ後ろに「する」を付けて「講義する」のように複合動詞として使える名詞(影山 [26] の用語では、「動名詞」あるいは「複合事象動詞」であり、[...] 直接に「する」を付けることはできないが、「～をする」という形で述語的に使えるもの(影山 [26] の用語では「単純事象動詞」)である。これらの名詞をひっくり返して「デキゴト名詞」と呼ぶことにしよう。これらは、それ自体で出来事や活動を表すから、「～を始める」「～が始まる」というと、その活動が実際に開始することである。(p. 103)

本論には直接関係しないが、デキゴト名詞は影山の単純/複合事象名詞に限られるわけではない。黒田・飯田 [22] が指摘するように、日本語にも支援動詞 (support verb) [3, 5, 6, 7, 8, 11, 12] に支援されないと述語としては使えないが、名詞化の挙動から見て明らかに事態性/述語性をもっている名詞がそれなりの数存在する。例は (6) の「反感」や「興味」(支援動詞は「もつ」や「いただく」) や (7) の「苦言」や「苦情」(支援動詞は「言う」や「呈する」) である:

- (6) a. Y が X に {i. *反感; ii. *興味; iii. 嫉妬} する
b. Y が X に {i. *反感; ii. *興味; iii. ?嫉妬} をする
c. Y が X に {i. 反感; ii. 興味; iii. 嫉妬} を {i. もつ; ii. いただく; ii. 覚える; iv. 感じる} する
d. Y の X への/に対する {i. 反感; ii. 興味; iii. 嫉妬}
- (7) a. Y が X に Z と (*いう) {i. *苦言; ii. *苦情; iii. 意見} する
b. Y が X に Z と (??いう) {i. *苦言; ii. *苦情; iii. 意見} をする
c. Y が X に Z と (いう) {i. 苦言; ii. 苦情; iii. 意見} を {i. 言う; ii. (*) 呈する²⁾}
d. Y の X への/に対する Z と (*いう) {i. 苦言; ii. 苦情; iii. 意見}

2.2.1 もう一つの用法

「始め(る)」には影山が問題にしていないもう一つ用法がある。次が例になる:

- (8) a. アメリカを始め(とし(て)), 多くの欧米諸国ではそれが問題になっている。
b. デジカメの普及と共に、ミノルタを始め(とし(て)), かつての花形カメラ企業の多くが没落した。

この例にある「始め(る)」の語彙的意味を語義 3 としよう。

これは一見したところ他の二つの語義と無関係に見えるが、実際にはそうではない。

まず最初に注意しておきたいが、語義 3 が本動詞としての「始める」の意味であるかどうかは問題で

²⁾ 「苦言を呈する」の組み合わせのみ容認可能

はない。「 X を始めとして、 X' は…」という構文で「始め」は「 X を Y とする」の Y の実現形であるのは間違いない。

だが、問題は、この形では「として」が省略されることが多く、実際の文章に現れる「始める」の語義2の使用例と多くの場合に見分けがつかないという実態があることである。従って、この場合の「始め」が「 X を Y として」の変項 Y を実現する名詞だとしても、この語義も事実上は他の二つと同じように語義の曖昧性が解消されなければならない。だが、 X が非デキゴト名詞である場合、これらの用法の区別は簡単ではない。

2.2.2 問題点

引用(5)に影山は次のように続ける:

- (9) これに対して、単純に個物を表すような名詞(モノ名詞と呼んでおく)は活動や行為の「～が始まる/を始める」構文で使うのは難しい。[...]「～を始める」構文の適否は語用論ではなく、目的語にくる名詞の語彙的意味によって決定されるということになる。(pp. 103–104)

「語用論ではなく」という制限はともかく³⁾「～を始める」構文の適否は[...]目的語にくる名詞の語彙的意味によって決定される」という主張は正しいと思われる。だが、「目的語にくる名詞の語彙的意味」の具体的内容が問題なのである。

私は以下で影山の言う「名詞の語彙的意味」はこれから見るように、次の理由で事実上空虚であり、説明の役には立っていないことを明らかにする:

- (10) a. 影山が名詞 X の特質構造だと言う構造は、実際には X の特質構造ではなく、 X を具体例にもつような意味変項(e.g., 意味役割)の特質構造である。
b. 仮にそれが X の特質構造だとしても、 X に応じて「 X を始める」の意味が脱曖昧化される仕組みが明示化されていない。

2.3 A' の妥当性

影山の論点を繰り返す:

A' . タイプ2の語義はGoldberg [4]の言う意味での構文的意味ではない。

これ自体は正しい主張である。だが、その理由はGoldbergはタイプ2の語義を構文的意味とは言わないからである。従って、この批判は単なる勇み足にすぎない。

2.3.1 タイプ2の語義の明示化と下位分類

タイプ2の語義の明示化と下位分類を与えるため、影山は次のように述べる:

- (12) ここで重要なのは、モノ名詞が「～を始める」構文に置かれると、その名詞自体には本来備わっていないと思われる活動や行為の意味合いが発生することである。すなわち、大きく分けると、(12)aのような「習い事・趣味」の概念、(12)bのような「団体活動」という概念、(12)cのような「製造販売」という概念である。(p. 106)

これに基づき、影山は「始める」語義2を(13)にあるように定義する:

- (13) ヒト Y が〈習い事・団体活動・製造販売〉を始める [= 影山の(13), p. 106]

ここで述べられているのは、ある意味では驚くべきことである。生成辞書理論では名詞 X の特質構造は「 X 自体に本来備わっている活動や行為の意味合い」であると定義されるはずだ。だとすれば、これは影山がここで言うところの「名詞 X 自体には本来備わっていないと思われる活動や行為の意味合い」の定義と矛盾する。この点は詳述の必要があると思われるが、影山の論文では触れられていない。

(12)に続けて、影山は次のように言う:

- (14) これは構文文法(Golberg [4]で言うところの「構文」に該当すると思われるかも知れない。構文文法の考え方によれば、このような[=(12)で規定した]意味解釈はまさに「構文」の賜物と見なされ、次のような公式が立てられるだろう。

- (13) 〈習い事・団体活動・製造販売〉を始める [= 影山の(13), p. 106]

しかし、このような公式を仮定しただけでは、そもそも、なぜ〈習い事・団体活動・製造販売〉といった意味でなければならないのか、という根本的な理由が説明されていない。以下では、目的語にくる名詞の語彙的意味がこの構文を支えていることを述べる。(29, pp. 106–107)

構文文法でもこの場合の意味を構文的意味と見なすのは一般的ではないという点を除けば、影山の問

³⁾ 私がこう言うのは、そもそも何をもって語用論とするかは論者によってテンでばらばらだからである。

題意識は健全で、私も共感する。だが、問題は「目的語にくる名詞の語彙的意味」とは何か?である。

具体的な議論を始める前に、用語法の問題を整理しておこう。

2.3.2 「構文」という用語法に関する注意

(14)で影山が問題にしているのは、術語の用語法の曖昧さに由来する表面的な問題にすぎない。「構文 (construction)」という術語は生成系の研究者とそれ以外の研究者 (Goldberg のような構文文法家もそれに含まれる) で異なった意味をもっている。生成系の研究者の一人として、影山は表層の文形式 (= 動詞の項構造の具現化 (のパターン)) なら何でも構文と呼ぶという伝統に従っている。LCS 研究を含めて、生成文法系では構文とは分類上の用語である。従って、 X という語が使われている文を「 X 構文」と総称するという (些か大雑把な) 用語法が極くあたり前のように通用する。

だが、構文文法家 [2, 4] が「構文」という用語を使っている時⁴⁾、その用途は文の分類ではない。構文文法で言う構文には、次のようにもっと積極的な意味がある:

- (15) 表層形式 $F = x_1 \cdot x_2 \cdots x_n$ が構文文法で言う構文となるのは、 F の意味 $M(F)$ が F を構成する語句 x_1, x_2, \dots, x_n の意味 m_1, m_2, \dots, m_n から構成できない場合に限る (ことになっている)。

従って、構文文法が「構文」と呼ぶものは、生成文法化が構文と呼ぶものの一部だけ (のはず) である⁵⁾。

(15) の定義に従うなら、仮に (13) が正しく、更に Goldberg が日本語が理解できたとしても、彼女は (13) は「始める」の語彙的な意味だと言うだろう。基本的に語の意味に帰着できる意味は構文の意味とは言わないからである⁶⁾。

⁴⁾ ただし、彼らの construction という用語の選択が妥当なものかという疑問は残る。construction は曖昧な語であり、今となってはどうしようもないことだが、誤解を避けることを優先するなら別により明示的な呼称を考えるべきだったのではないかという気もする。

⁵⁾ 認知言語学の一部にはこの定義から (意図的に) 外れ、あらゆるものを構文と見なす風潮があるけれど、これは望ましい方向性とは言えない。構文は構文でないものがあったこそ意味をもつ概念であるという点を忘れては困る。実際、それは構文の説明力を無効化する望ましくない方向性であるが、この論文ではその問題については詳しくは述べない。

⁶⁾ 定義の一定でない、いわゆる「構文」の意味を中本ら

2.4 B の妥当性について

影山の主張を繰り返す:

- (16) タイプ 2 の解釈は生成辞書理論で言う特質構造 (後で説明する (17) や (18)) によって説明可能である。

私は X の特質構造が「 X を始める」の解釈を決めるとい立場には反対しない。だが、影山が X の特質構造と呼んでいるものは生成辞書理論の言う意味での特質構造ではないことを指摘し、それを正すための説明を §2.5.4 で提案する。

2.4.1 影山の提案する特質構造

影山は「 X を始める」の X の具体値になる名詞「ピアノ」や「英語」、「会社」や「塾」の特質構造は示さず、その代わり〈習い事〉と〈団体活動〉の特質構造を示す

- (17) 〈習い事〉の特質構造 [= 影山の (14), p. 107]
- Agentive: それを日々練習する
 - Telic: それを習得し、自由に使いこなす
- (18) 〈団体活動〉の特質構造 [= 影山の (15), p. 107]
- Agentive: 基礎となる資格や条件を満たす
 - Telic: ある目的を果たすように継続的に行なう

これらについて影山は次のように言う、

- (19) これら [= (17), (18)] に共通しているのは、主体役割 (すなわち、その名詞概念の成立や出处) に記載された行為と、目的役割 (その名詞概念の恒常的な機能や目的) に記載された行為がともに [「始める」という文の] 主語の意志によって行われ、しかも両者に時間的な隔たりがなく一体のものとして捉えられているという点である」(p. 107)
- (20) 以上をまとめると、「モノ名詞を始める」という構文が成り立つためには、モノ名詞の発生 (主体的役割) と目的・機能 (目的役割) の両方が主語の意志によって同時にコントロールできるものでなければならないということになる。(p. 108)
- (21) [(13) に列挙した]「習い事、団体活動、製造販売」という概念は、偶然それらに限られるものではなく、

[18, 13] の言う超語彙的意味 (superlexical meaning) として捉え直しても、語義 2 が「始める」の語彙的意味という特徴づけは変わらない。超語彙的意味を担う形式的特徴の実態を明らかにするのは難しいが、Wray [17] が言う定型 (formulae) はその候補になるかも知れない。また池原ら [20, 19] の非線型表現 (nonlinear expressions) も構文とは何かを正確に理解するために非常に有益な概念である。

主体役割と目的役割の一体性ということから必然的にこれら（あるいは、類似の他の名詞）に限られてくるものと思われる。(p. 108)

X が非サ変系名詞の場合、 X は〈習い事〉、〈団体活動〉、〈製造販売〉のような一定の範囲に収まるという主張は重要であり、注目に値する。だが、主張の詳細は次の二つの理由で、真に受けるわけには行かない。

2.4.2 第一の理由

第一に、(19) には (22) のような反例が幾つか存在する:⁷⁾

- (22) a. 彼は苦悶を始めた。
 a' *彼は苦悶を見せ始めた。
 b. 彼は(見るからに)動揺を始めた。
 b' 彼は(見るからに)動揺を見せ始めた。
- (23) a. ?彼は(見るからに)狼狽を始めた。
 a' ?*彼は(見るからに)狼狽を見せ始めた。
 b. *彼は(見るからに)失態を始めた。
 b' ?彼は(見るからに)失態を見せ始めた。

これらの文で「苦悶」や「動揺」は「主語(=「彼」)の意志によって行われ」ていない⁸⁾。

この例は(25)の「噴火」「振動」「回転」「崩壊」の類例かも知れない(これらの文の主語には意図性が伴っていない):

- (25) a. その火山は(突然)噴火を始めた。
 b. その家は(突然)振動を始めた。
 c. その椅子は(突然)回転を始めた。
 d. K 政権は(突然)崩壊を始めた。

⁷⁾ この例に関しては加藤氏から容認できないという指摘を頂いた。Google で実例を検索したところ、728 例が見つかった。「我慢を始め(る)」が 19 例、「ガマンを始め(る)」が 11 例しかないのに較べると「動揺を始め(る)」はずっと容認度が高い。なお、「振動を始め(る)」の事例数も 796 なので、意味の特殊性を考えると、普通の頻度だと言える。

⁸⁾ 以前の版ではここに「敵は(見るからに)動揺を始めた」を挙げていたが、これは次に理由で好ましくない。[Y が X を始めた]の容認性判断は、 Y の数指定によって体系的に異なる。 Y が個体の集合を意味する場合、個体指示の例より容認度が明らかに改善される。例えば、

- (24) a. ??彼は(*ばたばたと)死に始めた。
 b. 彼らは(ばたばたと)死に始めた。
 これは問題を複雑にしている要因なので、潜在的集合名詞(e.g. 敵)を Y に使った例は論拠として十分ではない。

別の観点では、(26a)の「後悔」や「悶絶」の意図性が問題になる。

- (26) a. 彼は早くも後悔を始めた。
 a' ?彼は早くも後悔を見せ始めた。
 b' その男は突然、悶絶を始めた。
 b. *その男は突然、悶絶を見せ始めた。

以上の例はいずれも X がサ変名詞—(25) に関しては非対格性サ変名詞—の場合だが、 X がサ変名詞と非サ変名詞の場合で意図性の関与の仕方が変わるなら、その理由づけが必要である。理由づけがうまく行かない限り、これは影山の一般化(19)が過剰般化であることを示唆する⁹⁾。

2.4.3 二種類の心理動詞と三種類の開始¹⁰⁾

(27) と (29) の違いから、両者は同じサ変型心理状態名詞でも性質が違うことがわかる:

- (27) a. Y が X に困惑する。
 b. * Y が X {に; から} 困惑を {被る; 受ける}。
 c. Y が X に困惑を覚える。
 d. * X が Y に困惑をかける。
 e. * Y が X に困惑をかける。
 f. ?* X は Y には困惑だ。
- (28) a. * X [as CAUSER] の困惑が始まった。
 b. Y [as EXPERIENCER] の困惑が始まった。
- (29) a. Y が X に迷惑する。
 b. Y が X {に; から} 迷惑を {被る; 受ける}。
 c. * Y が X に迷惑を覚える。
 d. X が Y に迷惑をかける。
 e. * Y が X に迷惑をかける。
 f. X は Y には迷惑だ。
- (30) a. ? X [as CAUSER] の迷惑が始まった。
 b. * Y [as EXPERIENCER] の迷惑が始まっ

⁹⁾ 動揺をコントロールの行使の実例ではなく、コントロールの行使の不全=喪失の実例と見なすなら、影山の一般化を完全に否定することにはならないかも知れない。

事例を見ると、「動揺を始める」「狼狽を始める」「悶絶を始める」は

- (1) a. ぼうっと見ていると、テレビが突然不思議な番組を始めた
 b. ぼうっと見ていると、テレビが突然不思議な番組を {i. 流し; ii. 放映し} 始めた
 のような例との連続性があるように思われる。これは「ウソ泣きを始める」「演技を始める」とは違い、意図性が稀薄である。

¹⁰⁾ この節は 2007/07/01 の改訂で追加された。

た。

(27a) と (29a) を見る限り両者は、*Y* が EXPERIENCER、*X* が STIMULUS の心理動詞に見えるが、他の違い環境での挙動の違いから、「困惑」は *Y* の EXPERIENCER as POSSESSOR の特性が心理動詞化したもの、「迷惑」は *X* の STIMULUS as CAUSER の特性を表わす述語「迷惑だ」が心理動詞化したもの、という違いがありそうだ。これは自動詞形で (28a) と (30a)、(28b) と (30b) の可否が対称的になっていることから明らかである。

「迷惑する」は「まぶしがる」や「暑がる」や「寒がる」に似ており、「困惑する」は「悲しがる」や「嬉しがる」に似ている。「苦悶(する)」「後悔(する)」は「困惑(する)」と同じタイプである。

以上のことから考えて、「*Y* が *X* を始める」には (少なくとも) (31)、(33)、(32) の 3 つの場合があり、これらはどれか一つに還元できない:

(31) Nonresponsive Self-Initiation:

Y [as SELF-INITIATOR is-a SELF-CAUSER] が *X* [as *Y*'s own ACTIVITY] の進行を始める: e.g.,

- a. ダンスを始める
- b. 習字を始める

(32) Responsive Self-Initiation:

Y [as EXPERIENCER AND as RESPONDER is-a SELF-INITIATOR is-a SELF-CAUSER] が *X* [as *Y*'s (unintended) RESPONSE to STIMULUS *Z*] を (露呈し、見せ) 始める: e.g.,

- a. 困惑を始める
- b. 動揺を始める
- c. 小言を始める

(33) Nonresponsive Nonself-Initiation:

Y [as NONSELF-INITIATOR is-a NONSELF-CAUSER] が *X* [as PROGRESSIVE PHENOMENON] の進行を始め (?させ) る: e.g.,

- a. 番組を始める
- b. 劇を始める

(34) Responsive Nonself-Initiation:

SUPPRESSED under feature contradiction

(25) に示した「*Y* が噴火を始める」や「*Y* が回転を始める」がこれらのどれに帰属するかは自明では

ないが、(32) ではないかと思う。違いは反応のタイプである。

これらのうち、影山の説明と一致するのは、(31) のみであり、影山の説明は他の二つの場合に関しては妥当な説明になっていない (なお、動詞補完に大きな自由度が許されているのは (31) のようだという点も付記しておこう)。

2.4.4 第二の理由

影山の主張 (19)、(20)、(21) の詳細は真に受けるわけには行かないと言った第二の理由はこうである: 影山が主張は「*X* を始める」の用法を説明するには正しい一般化かも知れないが、それが (17)、(18) のような特質構造を持ち出して説明されるべきものなのかは、控え目に言っても疑問である¹¹⁾。以下では、私がこう言う理由を明確にする。

2.5 特質構造が記述すべき情報

(17)、(18) の定義は明らかに論点先取である。というのは、影山が特質構造だと言っているものは生成辞書理論が想定する特質構造とは全く異なるものであり、謂わば生成辞書理論をヒントに自説のために新たに構築された概念だからである。この点を例を挙げて明らかしよう。

例えば (35) の文は、(36) に与えるような解釈を受ける:

(35) *Y* がピアノを始める

- (36) a. *Y* が〈習い事〉としてピアノを始める
b. *Y* が〈扱い品目〉としてピアノを始める

この事実を説明するのに、生成辞書理論に基づく「正統派」の分析が「ピアノ」について想定する特質構造の概略は、(37) のようなものになるはずである:

(37) 「ピアノ (*x*)」の特質構造

- a. Agentive [主体役割]:
 - i. 〈e, 〈製造者 *a* が、*x* を、製造する〉〉

¹¹⁾ 影山がこのように「コントロール」という概念に固執するのは不思議であるが、些か穿った見方をすれば、そうでもないかも知れない。彼は自分が Jackendoff [10] の語彙概念構造 (Lexical-Conceptual Structure: LCS) の修正版として提案している [[*x* ACT-On *y*] CONTROL [BECOME [*y* BE AT-*z*]]] の上位事象を特質構造の Agentive Role、下位事象を Telic Role と同一視しようとしている可能性がある。だが、LCS の指定が特質構造の指定の特殊な場合だという可能性はあっても、その逆は非常に考え難い。

- ii. 〈e, 〈販売者 *b* が, *x* を, 店 *c* で, 販売する〉〉
- iii. 〈e, 〈学習者 *d* が, *x* の演奏の方法 *e* を, 教師 *f* から, 習う〉〉
- iv. ...
- b. Telic [目的役割]:
 - i. 〈e, 〈演奏者 *g* が, *x* を, 教師 *f* から習った方法 *e* で, 演奏会 *h* で, 演奏する〉〉
 - ii. 〈e, 〈購入者 *i* が, *x* を, 販売者 *b* の店 *c* から, 購入する〉〉
 - iii. ...
- c. Formal: ...
- d. Constitutive: ...
- e. 具体例
 - i. *a* の例: ヤマハ, カワイ, スタンウェイ, ベーゼンドルファー, ベヒシュテイン, ...
 - ii. *b* の例: ヤマハ, サンリツ, ...
 - iii. *g* の例: イーボ・ポゴレリッチ, グレン・グールド, スヴァトスラフ・リヒテル, 野田恵, ...
 - iv. *h* の例: カーネギーホール, サントリーホール, ...

これは「本」の特質構造 (2) と対応するように特定された。

(2) 「本 (*x*)」の特質構造 [再掲]

- a. Agentive:
 - i. 〈e, 〈執筆者 *a* が, *x* を, 書く〉〉
 - ii. 〈e, 〈出版者 *b* が, *x* を, 出版する〉〉
 - iii. 〈e, 〈販売者 *c* が, *x* を, 書店 *d* で, 販売する〉〉
 - iv. ...
- b. Telic:
 - i. 〈e, 〈読者 *d* が, *x* を, 読む〉〉
 - ii. 〈e, 〈購入者 *e* が, *x* を, (販売者 *c* の) 書店 *d* から, 購入する〉〉
 - iii. ...
- c. Formal: ...
- d. Constitutive: ...

例えば「ピアノ」の特質構造が (37) のように、本の特質構造が (2) のように、「習う」「書く」「売る」

「読む」のような具体的な述語に言及して定義されるのに較べると、(17), (18) はそのような言及をしておらず、内実がないほど抽象的である。

2.5.1 名詞の特質構造と動詞の特質構造の混同

以上のことを基に考えると、影山が想定する (17), (18) は (37) や (2) とはまったく別のタイプの情報を表していることが明らかになる。実際、影山の (17), (18) は、モノの特質構造というよりも、単に〈習う〉と〈資格を必要となる活動する〉という二つの動詞の特質構造を記述したものである。従って、いつの間にか論点が名詞の特質構造から動詞の特質構造にすり替わっている¹²⁾。

百歩譲って、(17), (18) が名詞の特質構造だと見なしても、指定の内容があまりに抽象的なので、その精度の高さ (つまり無関係の事例を有意義に排除できる程度) は期待できない。どんなに多くの正例を記述できても、負例を正しく排除できない記述は精度が低い記述である。言語学では (あれにもこれにも当てはまる) 被覆率 (のみ) が高い記述が好まれるが、精度を犠牲にした記述は、元々正しい記述とは言えない¹³⁾。

すでに見たように、影山の「始める」のタイプ 2 の語義を (13) と規定し、そこから「ピアノ」や「英語」、「会社」や「塾」の特定の名詞の特質構造は一切書き表さずに、いきなり「ピアノ」や「英語」、「会社」や「塾」が具体例になる〈習い事〉と〈団体活動〉の特質構造を (17) と (18) に書き下す。つまり、「ピアノ」や「英語」が〈習い事〉であることや、「会社」や「塾」が〈団体活動〉であることは自明だと見なされている。

だが、これは明らかに妥当な扱いではない。具体的な名称が高次の概念である〈習い事〉の具体事例

¹²⁾ 生成辞書理論は動詞の特質構造というものを問題にしていない。影山のこの論文とそれに続く幾編かの論文 [30] は動詞の特質構造の議論に火をつけたという点で、重要な貢献をしたと言える。

¹³⁾ 犯罪者の逮捕の効率を考えれば、この点がわかりやすいだろう。ある犯罪事件の犯人 p_1, p_2, \dots, p_n を逮捕するのに、怪しい人物を手当たり次第に逮捕すれば、逮捕者 N 人中に n 人の犯人が全員含まれる可能性 (=被覆率 $c = \frac{n-m}{n}$ (m は逮捕されなかった犯人の数) は可能な限り大きくなるが、その代わりに、逮捕者の数 N に対する犯人の数 n の比率 (=判断の精度 $p = \frac{n}{N}$) は可能な限り小さくなる、つまり非犯人を犯人と誤認 (識) するが増える。理想は $c = p = 1.0$ であるが、一般に c, p は両立しないことが知られている。

であることが自明ではないからこそ、生成辞書理論は特質構造を使ってそれを明示化しようするのである。従って、「ピアノ」や「英語」、「会社」や「塾」がおのおの〈習い事〉と〈団体活動〉の具体例であることを明示するのが生成辞書の言う意味での特質構造の機能なら、影山の「*X* を始める」の説明が*X*の特質構造に基づいているとは言えない。更に言うならば、「(17)と(18)と書いて、「ピアノ」や「英語」や「会社」や「塾」の特質構造が説明される」とするのは、説明されるべき結果を先取りしているという点で問題を孕んでいると言える。

2.5.2 「対象」名詞と「役割」名詞の区別

もう一点、〈習い事〉とか〈団体活動〉や〈業務〉などの概念に関して、全般的に注意しておきたいことがある。これらは、モノ名詞ではなく、サ変名詞（影山の言う〈単純/複合〉事象名詞）でもない。従って、〈習い事〉とか〈団体活動〉とか〈業務〉を「ピアノ」「英語」「会社」「塾」と同じように扱うことには、根本的にムリがある。

黒田・井佐原 [21] は日本語語彙大系の名詞概念分類体系を検討し、役割名を対象名から区別した¹⁴⁾。「ピアノ」や「英語」は対象名だが、「習い事」や「業務」は役割名である。

だが、問題はこれに留まらない。対象名と役割名の区別を想定するなら、「会社」「塾」ですらモノ名詞とは言えず、役割名としての挙動の方が支配的である。

2.5.3 最低限の記述精度の保証

仮に(17),(18)の記述精度がそれなりだとしても、「*X* を始める」で*X*が非デキゴト名詞のとき、その解釈が(2)a, b, cのどれになるのかは規定されておらず、単に(2)a, b, cに幾つかの代表的な例を挙げているだけである。従って、任意の*X*について「*X* を始める」が言えるか、言えるとすれば、(2)a, b, c(あるいはそれ以外のもの)のどの解釈になるかを予測できない。

つまり、影山の「説明」は「*X* を始める」の語義の脱曖昧化の仕組みを自明のものとして排除している。これは生成辞書理論の目的とは相反している。

2.5.4 本稿の提案

問題は「*X* を始める」で*X*が非事態性名詞(=影山の言うデキゴト名詞)のとき、それが解釈可能となる条件を規定することだった。その目的のため、私は次を提案する:

- (39) *X* が非事態性名詞の「*Y* が *X* を始める」が「*Y* が *X* を *V* し始める」と再解釈できるのは、
- a. *V* が *X* の特質構造の Agentive を規定する述語 $P = \{p_1, p_2, \dots, p_n\}$ のどれかになっているとき、その時に限る。
 - b. ただし、*P* には [販売 > 職業 > 趣味 > ...] のような優先順位があるとする。
- (40) 優先順位は *X* によらず固定されているのか、*X* ごとに異なるのかはわからない。この点は保留する。

これは影山が(19),(20),(21)として述べている一般化と同じ予測をするが特質構造への言及のし方がまったく異なる。「ピアノを始める」が「ピアノを弾き始める」の意味にならない理由は、「弾く」が Agentive ではなく Telic を構成する述語だから、というのが私の提案する説明である。

2.5.5 〈生産物〉と〈流通物〉の区別

なぜ「売る」が Agentive にあるのか不思議に思う読者がいるかも知れない。

まず、モノの〈生産〉と〈流通〉は概念的に区別する必要がある。この区別の下で、人工物の特殊な場合である工業生産物の特質構造は(41)のように、その特殊な場合である楽器の特質構造は(42)のように、その特殊な場合である「ピアノ」の特質構造は(43)のように指定されるだろう:

- (41) a. Agentive: 〈制作者〉が制作するもの
b. Telic: 〈使用者〉がある〈目的〉に使用するもの
- (42) a. Agentive: 〈楽器制作者〉が制作するもの
b. Telic: 〈楽器演奏者〉が〈楽器演奏〉に使用するもの
- (43) a. Agentive: 〈ピアノ制作者〉が制作するもの
b. Telic: 〈ピアノ演奏者〉が〈ピアノ演奏〉に使用するもの

状況の記述を単位とすると、次の(44)のような継承関係=特殊化の関係がある:

¹⁴⁾ 同様の区別は [9] にも見られる。

- (44) a. 〈楽器制作〉 is-a 〈制作〉 [= (42)] is-a (41)
 b. 〈ピアノ制作〉 is-a 〈楽器制作〉 [= (43) is-a (42)]

個体の記述を単位とすると、次の (45) のような継承関係=特殊化の関係がある:

- (45) a. 〈ピアノ製作者〉 is-a 〈楽器製作者〉 is-a 〈製作者〉
 b. 〈ピアノ演奏者〉 is-a 〈楽器演奏者〉 is-a 〈演奏者〉
 c. 〈ピアノ演奏〉 is-a 〈楽器演奏〉 is-a 〈目的〉

これに対し、流通物=商品としての「ピアノ」の特質構造を指定しようとする、次のようになるのが自然であろう:

- (46) a. Agentive: 〈販売者〉が販売するもの
 b. Telic: 〈購買者〉が〈ある目的〉のために購買するもの

というのは、商品というものは販売者が(自分で制作するか、どこからか仕入れて)売らない限り、購買者は入手できないものだからである。これは〈制作〉と〈販売〉は「何かをこの世に存在させる」別の次元だということに等しく、これが「ピアノ」の主体役割〈制作〉と〈販売〉がある理由である。

だが、実際のところ、語の特質構造がいかに記述されるべきかに関しては、明確な正解が(わから)ないことが多い。これは生成辞書理論に課せられた課題の一つである。これを解決するには、少なくとも(形式)オントロジー [9, 32] から知見を援用するのは不可欠であろう。

2.6 Cの妥当性について

begin X と「X を始める」の比較を通じて、影山は次のように主張する:

- (47) 英語では名詞の特質構造の中から適切な意味を的確に抽出することができるが、日本語ではそれが難しい。[...] 言い換えれば、名詞の特質構造の中身が、英語では比較的「見えやすい」のに対して、日本語では不透明である。(p. 110)
- (48) これと平行する現象が動詞にも観察される。影山 [27]、影山・由本 [31]、影山編 [28] などで指摘したように、動詞の使い方にも英語と日本語とでは著しい違いがある。英語では同じ一つの動詞が多様な構文交替を見せるが、これは英語が動詞の形態はそのままにして、直に意味構造を合成したり組み替えた

りするということである。他方、日本語ではほとんどの場合、複合動詞や迂言的表現といった有形の手段によって意味関係を明示する必要がある。このことから、《英語は意味に依拠した言語》、《日本語は形態に依拠した言語》という類型が立てられるだろう。(pp. 110-111)

特質構造の定義に問題がある以上、主張 (47) の信頼性には少なからず疑問がある。

主張 (48) に関しても、以下のような問題が残っている。

2.7 「始められる」モノは何か?¹⁵⁾

影山 [29] は (49) と (50) のようなデキゴト名詞が「始める」のヲ格に現れることができない事実を認識していないし、彼が提案している説明は—少なくとも論文に書かれた通りでは—この事実を説明できない¹⁶⁾。

- (49) a. 彼女は { i. *結婚; ii. *妊娠; iii. *辞退; iv. ?*出席; v. *忍耐 } を始めた。
 b. 多くの女性が { i. 結婚; ii. 妊娠; iii. 辞退; iv. 出席; v. ?*忍耐 } を始めた。
- (50) a. 彼は { i. *失恋; ii. *失念; iii. *失業; iv. ?*感動; v. ?*緊張 vi. ?*損 } を始めた。
 b. { i. その機械; ii. ?*彼 } は (突然) 振動を始めた。

影山も正しく指摘しているように、行為者の意図が問題になるので、(50) にある意図性を発揮できない動名詞の説明はそれほど厄介ではない。問題となるのは、(49) にある意図性が発揮される動詞である。

だが、「結婚」や「妊娠」が始められないのは、なぜか? —これは見かけほど単純な問題ではない。

2.7.1 Xの〈進行〉性の有無

「結婚」や「妊娠」のような動詞—おそらく瞬間動詞類—が始められない理由を説明するため、加

¹⁵⁾ この節の内容は [23] に伴って 2007/07/01 に改訂された。

¹⁶⁾ 影山はサ変名詞、準サ変名詞が全部同じ挙動をすると明示的に主張しているわけではないので、ここで問題にしている事実を説明するための補足仮説を追加することは可能である。実際、影山の論文は事実上「X を始める」で X がサ変名詞(「する」が続く)、準サ変名詞(「をする」が続く)場合の解釈のみに論点を限定している。とはいえ、サ変名詞、準サ変名詞が全部同じ挙動をするわけではないということを意識するのは、どんな場合でも必要なことである。

藤・黒田 [24, 23] は「*X*が始まる」と「*Y*が*X*を始める」の容認条件として (51) を提案している:

- (51) F: “*X*が始まる”; G: “*Y*が*X*を始める”は、
a. *X*が〈進行〉を表わす名詞であるか、
b. Gで“*Y*が*X*を*V*し始める”という形に
適当な*V*が補完されるならば解釈可能で
ある。

補完される*V*の特定については [24] を参照されたい。〈進行〉の定義、特に〈プロセス〉との関係は A.1 を参照されたい。

2.7.2 進行性の判定

[23] は次の検査で*X*の進行性を F, G の容認度とは独立に判定できると主張している:

- (52) *X*はこうして進行する

(52) の検査での値 [0,1] が 1 に近いほど*X*は進行性が高く、0 に近いほど進行性が低い。

一部のサ変名詞はこの検査の結果が高くなく、進行性がないか、あっても低いことがわかる。例えば、

- (53) a. ?*結婚はこうして進行する。
a' 結婚話はこうして進行する。
b. ?*妊娠はこうして進行する。

予測通り、(52) の検査で高い進行性を示す名詞はサ変名詞には限らない。例えば、

- (54) a. 事件はこうして進行する。
b. 縁談はこうして進行する。
c. 公判はこうして進行する。

ここで*X*の実現値になっている名詞はどれも非サ変名詞である。F の容認度はこの検査が予測する通りである:

- (55) a. ?*結婚が始まった。
b. ?*妊娠が始まった。
c. 事件が始まった。
d. 縁談が始まった。
e. 縁談が始まった。

ただし、進行性は F, G の容認可能性の必要条件であって十分条件ではない。(56) と (57) にあるように進行性が認められるのに F で使えない名詞が

存在する:¹⁷⁾

- (56) a. ガンはこうして進行する。
b. 精神病はこうして進行する。
(57) a. 火事はこうして進行する。
b. 地震はこうして進行する。
c. 台風はこうして進行する¹⁸⁾。
(58) a. ?*ガンが始まった。
b. ?*精神病が始まった。
(59) a. ??火事が始まった。
a' 山火事が始まった。
b. ??地震が始まった。
b' 群発地震が始まった。
c. ??台風が始まった。

これは進行性が十分条件でないことを意味しているデータである。F, G が言えるための十分条件が何かは未発見であるが、私と加藤は (i) 継続の長さ (ii) 始まり (と終わり) の明確さが関係しているのではないかと見こんでいる。後者に関しては A.2 を参照を参照されたい。

2.7.3 Telic か Agentive か、それが問題だ

「番組」や「舞台」のような人工現象の一部、「台風」「火事」のような自然現象の一部、「ガン」や「肝炎」のような生理現象の一部は、内在的な経過時間をもつ〈進行〉の具体例である。これらが始まるものであることを特質構造のどこかで指定するなら、どこにすべきだろう?

このような名詞を*X*として、*X*の Formal role/slot に*X* is-a progression (i.e., “Formal: Progression(*X*)”) と指定するのは不可欠である (この*X*は必然的に事象構造をもつ)。だが、これで十分ではない。Progression の具体例が全部「*X*が始まる」で言えるわけではない。

「*X*が始まる」と言えるという情報を指定するのは Telic role/slot ではなく Agentive role/slot のはずである。*X*の特質構造の Agentive role/slot は*X*の〈由来〉を指定する場前であって、別に意味役割としての動作主性 (Agentivity) を指定する場前ではないことに注意されたい¹⁹⁾。

¹⁷⁾ 一般に病名と症状名 (これにはサ変名詞が多い) は同じ挙動をしないことがわかっている。

¹⁸⁾ これは物理移動の意味と進展の意味に関して曖昧である。

¹⁹⁾ これは多くの研究で誤解されている点なので、注意が必

2.7.4 主語の複数性/集合性

(59b) は主語の複数性/集合性から生じる期間の延長の効果によって説明できる可能性がある。同じことが「山火事」の場合にも言えるかも知れない。これは検討すべき課題である。

2.7.5 対立する説明

「X を始める」の解釈について、次の二つの可能性のどちらが妥当かを考えた方がよい:

- (60) a. X がサ変名詞だから「話を(し)始める」「散歩(を)し始める」の解釈がある
 b. 「話」や「散歩」が自体が〈進行〉だから、(始めようと思えば)始められ、それと同じ理由で「～(を)する」がつけられるが、これは必要条件ではない。

循環性を避けるならば、(60a) よりも (60b) の方が妥当性が高いのではないだろうか? だとすると、「結婚を始める」が言えないのは、「結婚」は〈進行〉ではないから、と結論する方が妥当性が高いことになる。

補足したいのは、〈進行〉性は文脈からの影響、すなわち共合成によって変更されうる、という点である。実際、(61) に挙げたように、「結婚」に「し(てい)る」形があることは、それに〈進行〉の意味が内在していないという結論と一致しないわけではない:

- (61) a. (いやいや) 結婚 (?*を) している
 b. *(いやいや) 結婚を始め(てい)る
 c. ???(いやいや) 結婚を続け(てい)る
 (62) a. 結婚 {i. の初め (cf. *の始め); ii. ?*(の) し始め} の頃には誰でも...
 b. 結婚 {i. ?*の終わり; ii. *(の) し終わり} の頃には誰でも...

少なくとも結婚に〈終わり〉があることは、パターンとしては期待されていない²⁰⁾。

2.8 日英語の事態性名詞の比較

影山の英語データと日本語データの比較は、特質構造に関する限りは不十分であり、必ずしも全面的に信頼できるものではない。(48) のような強い主張

のためには、英語の事態性名詞と日本語の事態性名詞の入念な比較が必要であることは言を待たない。

実際、影山は (63) の「始める」三つを区別していないし、それらを (64) の begin の三つの区別とも対比していない。

- (63) a. Y が X を始める [X は名詞]
 b. Y が X をし始める [X は名詞]
 c. Y が X し始める [X は動詞]
 (64) a. Y begin X [X は名詞]
 b. Y begin X [X は動詞派生の名詞]
 c. Y begin X-ing [X は動詞]

(counter-)attack のような一部の名詞では、英語では (64a) と (64b) との区別がない。例えば、次の (65a) の (counter-)argument は (67a) ではなく、(67b) と平行的に捉えられるべきであり、(66a) の (counter-)attack は (68a) ではなく、(68b) と平行的に捉えられるべきである。

- (65) a. Y begin a(n) (counter-)argument (against Z) (on W).
 b. Y begin (counter-)argu-ing against Z (on W).
 (66) a. Y begin a(n) (counter-)attack (on Z).
 b. Y begin (counter-)attack-ing
 (67) a. Y が (W に関して) {i. 議論; ii. (Z への) 反論} を始める
 b. Y が (W に関して) {i. 議論; ii. (Z へ (*の)) 反論} をし始める
 c. Y が (W に関して) {i. 議論; ii. (Z へ (*の)) 反論} し始める
 (68) a. Y が (Z への) {i. 攻撃; ii. 反攻} を始める
 b. Y が (Z へ (の)) {i. 攻撃; ii. 反攻} をし始める
 c. Y が {i. Z を攻撃; ii. Z へ反攻} し始める

(counter-)argument が動詞派生名詞であるのは明らかだが、(counter-)attack が動詞からのゼロ派生名詞なのか単なる動詞/名詞同形の語なのかは、議論の別れるところである。だが、いずれにせよ、attack は piano や book とは別のタイプの名詞であり、日本語のサ変名詞に類似する。これは影山が強調する日英語の違いというより、それらの統語・形態論の平行性を示すデータであるように思われる。

要である。

²⁰⁾ もちろん、今後日本で離婚率が高まれば、この判断が大きく変わる可能性はある。

3 終わりに

本稿では生成辞書理論の特質構造の概念が濫用されていると思われる場合 [29] を検討し、対案を提示した。

影山の提案には幾つか非常に興味深い点もあるが、必ずしも生成辞書理論の方向性と一致するものではない。私が思うに、これは名称が人口に膾炙しているほどには、特質構造を始めとする生成辞書理論の概念が理解されていないことの現われではないかとも考えられる。名詞の意味構造は重要な課題であり、その先駆である生成辞書理論の理解は不可欠である。今後、より多くの研究者が正しい理解のもとに名詞の意味構造研究を推進することを期待したい。

もう一点、この研究の意義として些細ではないことを指摘しておきたい。この論文での分析が妥当であれば、事象性をもつのはサ変名詞類とは限らないことが帰結する。事態性は非サ変名詞の一部に内在する場合があります、事態性は品詞の問題 (e.g., サ変名詞か否か) には帰着できない。「番組」や「舞台」のような人工現象の一部、「台風」や「火事」のような自然現象の一部、「ガン」や「肝炎」のような生理現象の一部には内在的な経過時間がある (これは、言語学を離れオントロジー [9, 32] の観点で見した場合、別に驚くべきことではない)。

事態性的一种である進行性をもつ名詞 X が全部「 X が始まる」の形で言えるわけではないが、この情報をこれらの名詞の特質構造に指定するなら、それは Telic ではなく Agentive であろう (Agentive は別に意味役割としての Agent を表わす役割ではないことに注意されたい)。

付録 A

A.1 〈プロセス〉と〈進行〉の定義

〈プロセス〉 (process) と 〈進行〉 (progress(ion)) [is-a 〈プロセス〉] という概念を、次のような (オントロジー的) 概念であると定義する:

(69) 定義に必要な要素と記法の定義:

- a. 〈時間〉 T の十分な長さをもった連続な部分 $R \in T$ (= 〈期間〉) 上に、((一定とは限らない) 〈間隔〉 $d > 0$ で隔てられた) 〈時点

列〉 $[t_1, t_2, \dots, t_n]$ を定義する (t_i は R の要素で、 $\neg R$ の要素ではない)。 t_{i+1} は時点 t の (d 後の) 時点を表わす。

- b. 時点 t での X の 〈状態〉 (state) を $X(t)$ と表わす。

(70) 〈プロセス〉の定義: X が 〈プロセスである (X)〉 という特性をもつのは次の時に限る:

- a. $X(t_i) \neq X(t_j)$ ($t_i \in R, t_j \notin R$)
- b. 典型性条件 1: $X(t_i)$ には特徴的なパターンがあり、
- c. 典型性条件 2: そのパターンは T 上でしばしば二度以上生起する=反復する。

(71) 〈進行〉の定義: X が 〈進行する (X)〉 という特性をもつのは次の時に限る:

- a. $X(t_i) \neq X(t_{i+1})$ ($t_i \in R$) AND $X(t_i) = X(t_{i+1})$ ($t_i \notin R$) であり、
- b. 典型性条件 1: $[t_1, t_2, \dots, t_n]$ には特徴的なパターンがあり、
- c. 典型性条件 2: そのパターンは T 上でしばしば二度以上生起する=反復する。

つまり、 R の範囲内でのみ、 X の時点 $t+1$ での状態は、その直前の時点 t での状態 $X(t)$ と異なり、その異なりのパターンは特徴的である (一般に R 内でのみ、 $X(t_1) \neq X(t_2) \neq \dots \neq X(t_i) \neq X(t_{i+1}) \neq \dots \neq X(t_{n-1}) \neq X(t_n)$)。

簡単に言うと、

(72) X が T 上の (しばしば反復される) 期間 R 内で常に R 外の状態と異なる状態にあるならば、 X は 〈プロセス〉である。

(73) X が T 上の (しばしば反復される) 期間 R 内で常に (検知可能な) 状態変化をし、かつ R 外では常に (検知可能な) 状態変化をしないという特徴を有するならば、 X は 〈進行 (するもの)〉 である。

A.2 〈プロセス〉の〈始まり〉と〈終わり〉の明確さの定義

X の t での状態と $t+1$ での状態の違いの大きさを $\Delta(t, t+1) = |X(t_{i+1}) - X(t)|$ で表わす。

(74) 始まりの明確さの定義

- a. X の始まりは、時点列 $[s_1, s_2, \dots, s_n]$ と $[t_1, t_2, \dots, t_n]$ ($s \notin R, t \in R, s < t$) として、

- s_n を s の最後の値, t_1 を t の最初の値とする時, $\Delta(s_n, t_1)$ が大きいほど明確である.
- b. ただし, $\Delta(s_n, t_1)$ は少なくとも閾値 θ より大きくないと R とそれ以前を区別できない.
- c. $\Delta(s_n, t_1)$ が正確にいつ閾値 θ より大きくなっているかを言えない場合, X の始まりは不明確である.

(75) 終わりの明確さの定義

- a. X の終わりは, $[t_1, t_2, \dots, t_n]$ と $[u_1, u_2, \dots, u_n]$ ($t \in R, u \notin R, t < u$) として, t_n を t の最後の値, u_1 を u の最初の値とする時, $\Delta(t_n, u_1)$ が大きいほど明確である.
- b. ただし, $\Delta(t_n, u_1)$ は少なくとも閾値 θ より大きくないと R とそれ以後を区別できない.
- c. $\Delta(t_n, u_1)$ が正確にいつ閾値 θ より大きくなっているかを言えない場合, X の終わりは不明確である.

参考文献

- [1] F. Busa, N. Calzolari, and A. Lenci. Generative Lexicon and the SIMPLE model: Developing semantic resources for NLP. In P. Bouillon and F. Busa, editors, *The Language of Word Meaning*, pp. 333–349. Cambridge University Press, Cambridge, UK, 2001.
- [2] C. J. Fillmore, P. Kay, and K. O'Connor. Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of *let alone*. *Language*, Vol. 64, No. 3, pp. 501–538, 1988.
- [3] T. Fontenelle. *Turning a Bilingual Dictionary into a Lexical-Semantic Database*, Vol. 79 of *Lexicographica Series Maior*. Max Niemeyer Verlage, Tübingen, 1997.
- [4] A. D. Goldberg. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, Chicago, IL, 1995.
- [5] M. Gross. Les bases empiriques de la notion de prédicat sémantique. In A. Guillet and C. Leclère, editors, *Formes Syntaxiques et Prédicats Sémantiques*, pp. 7–52. Larousse, Paris, 1981. (A special issue of *Languages* 63).
- [6] M. Gross. Une classification des phrases figées du français. *Revue Québécoise de Linguistique*, Vol. 11, No. 2, pp. 151–185, 1982.
- [7] M. Gross. *Grammaire transformationnelle du Française III: Syntaxe de l'adverbe*. Cantilène, Paris, 1986.
- [8] M. Gross. Constructing lexicon-grammar. In B. T. S. Atkins and A. Zampoli, editors, *Computational Approaches to the Lexicon*, pp. 213–263. Oxford University Press, Oxford, 1994.
- [9] N. Guarino. Some ontological principles for designing upper level lexical resources. In A. Rubio and Others, editors, *Proceedings of the First International Conference on Language Resources and Evaluation (Granada, 28–30 May 1998)*, pp. 527–534. ELRA, Paris, 1998.
- [10] R. S. Jackendoff. *Semantic Structures*. MIT Press, 1990.
- [11] I. A. Mel'čuk. *Dependency Syntax: Theory and Practice*. State University Press of New York, Albany, NY, 1988.
- [12] I. A. Mel'čuk. Lexical functions: A tool for the description of lexical relations in a lexicon. In *Lexical Functions in Lexicography and Natural Language Processing*. John Benjamins, Amsterdam, 1996.
- [13] K. Nakamoto, J.-H. Lee, and K. Kuroda. Constructional meaning affects preferred word order of a Japanese sentence: Psycholinguistic experiments on “caused-motion” and “caused-possession” constructions. In *Proceedings of the 4th International Conference of Construction Grammar, September 1–3, 2006, University of Tokyo, Japan*, pp. 227–228, 2006. <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/nakamoto-et-al-ICCG4-abstract.pdf>.
- [14] J. Pustejovsky. *The Generative Lexicon*. MIT Press, 1995.
- [15] J. Pustejovsky. Type construction and the logic of concepts. In P. Bouillon and F. Busa, editors, *The Language of Word Meaning*. Cambridge University Press, 2001.
- [16] N. Ruimy, E. Gola, and M. Monachine. Lexicography informs lexical semantics: The SIMPLE experience. In P. Bouillon and F. Busa, editors, *The Language of Word Meaning*, pp. 350–362. Cambridge University Press, 2001.
- [17] A. Wray. *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge University Press, Cambridge/New York, 2002.
- [18] 中本敬子, 李在鎬, 黒田航. 日本語の語順選好は動詞に還元できない文レベルの意味と相関する: 心理実験に基づく日本語の構文研究への提案. *認知科学*, Vol. 13, pp. 334–352, 2006. 「文理解」特集号.
- [19] 池原悟, 阿部さつき, 竹内奈央, 徳久雅人, 村上仁一. 意味的等価変換方式のための重文複文の統語的意味的分類体系について. *情報処理学会研究報告*, Vol. 2006-NL-176, pp. 1–8, 2006.

- [20] 池原悟, 徳久雅人, 村上仁一, 佐良木昌, 池田尚志, 宮崎正弘. 非線形な重文複文の表現に対する文型パターン辞書の開発. 情報処理学会研究報告, Vol. NL-170, No. 25, pp. 157-164, 2005.
- [21] 黒田航, 井佐原均. 意味役割名と意味型名の区別による新しい概念分類の可能性: 意味役割の一般理論はシソーラスを救う? 信学技報, Vol. 105, No. 204, pp. 47-54, 2005. [増補改訂版: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/roles-save-thesauri-rev1.pdf>].
- [22] 黒田航, 飯田龍. 文中の複数の語の(共)項構造の同時的, 並列的表現法: Pattern Matching Analysis (Simplified) の観点からの「係り受け」概念の拡張. 信学技法, Vol. 106, No. 191, pp. 1-5, 2006.
- [23] 加藤鉦三, 黒田航. 「*N* を始める」では何を始めるのか, 2007. “Morphology & Lexicon Forum 2007 (6/30-07/01, 2007) 神戸大学”での口頭発表.
- [24] 加藤鉦三, 黒田航. 「*N* を始める」についての考察: 英語の *begin a N* との比較を中心に. 第13回言語処理学会発表論文集, 2007.
- [25] 小野尚之. 生成語彙意味論. くろしお出版, 2005.
- [26] 影山太郎(編). 文法と語形成. ひつじ書房, 1993.
- [27] 影山太郎. 動詞意味論: 言語と認知の接点. くろしお出版, 1996.
- [28] 影山太郎(編). 日英対照: 動詞の意味と構文. 大修館, 2001.
- [29] 影山太郎. 語彙の意味と構文の意味: 「冷やし中華を始めました」という表現を中心に. 玉村文郎(編), 日本語学と言語学, pp. 101-111. 明治書院, 2002.
- [30] 影山太郎. 辞書的知識と語用論的知識: 語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて. 影山太郎(編), レキシコンフォーラム No. 1, pp. 65-101. ひつじ書房, 2005.
- [31] 影山太郎, 由本陽子. 語形成と概念構造. 研究社, 1997.
- [32] 溝口理一郎. オントロジー工学. オーム社, 2005.